

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、12%粒剤を50g/箱（育苗箱処理）、40%水和剤の100倍希釈液を500mL/箱（育苗箱灌注処理）、さらに10%液剤の250倍希釈液を3回パンクル散布（25L/10a）、計5回処理したところ、散布後7～28日の最大残留量は0.22, 0.30 ppmであった。

稲（稲わら）を用いた作物残留試験(2例)において、12%粒剤を50g/箱（育苗箱処理）、40%水和剤の100倍希釈液を500mL/箱（育苗箱灌注処理）、さらに10%ゾル剤の250倍希釈液を3回パンクル散布（25L/10a）、計5回処理したところ、散布後7～28日の最大残留量は0.40, 0.44 ppmであった。

### ③だいず

だいず（乾燥子実）を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を6kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（250, 300L/10a）、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後7～28日において0.006, 0.014 ppmであった。

### ④ばれいしょ

ばれいしょ（塊茎）を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を6kg/10a（植付時植溝処理土壌混和）、及び20%水溶剤の1,000倍希釈液を2回散布（150, 200L/10a）、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後7～42日において0.03, 0.02 ppmであった。

### ⑤てんさい

てんさい（根部）を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の100倍希釈液を1回定植当日苗灌注（1L/冊）し、さらに20%水溶剤の1,000倍希釈液を2回散布（300, 150L/10a）、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後6～22日において0.04, <0.01 ppmであった。

### ⑥だいこん（根部）

だいこん（根部）を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を6kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）したところ、散布後50～70日の最大残留量は0.026, 0.010 ppmであった。

だいこん（根部）を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を6kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）、1%粒剤を6kg/10a（生育期株元処理）処理し、さらに20%水溶剤の1,000倍希釈液を2回散布（200L/10a）し、計4回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後7～21日において0.08, 0.12 ppmであった。

⑦だいこん（葉部）

だいこん（葉部）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を6 kg/10 a（播種時播溝処理土壌混和）したところ、散布後50～70日の最大残留量は0.064, 0.038 ppmであった。

だいこん（葉部）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を6 kg/10 a（播種時播溝処理土壌混和）、1%粒剤を6 kg/10a（生育期株元処理）処理し、さらに20%水溶剤の1,000倍希釈液を2回散布（200 L/10a）し、計4回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後7～21日において1.50, 1.34 ppmであった。

⑧かぶ（根部）

かぶ（根部）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を9kg/10a（播種時土壌混和）し、20%水和剤の2,000倍希釈液を2回散布（150、150～200L/10a）し、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後3～14日において0.10, 0.15ppmであった。

⑨かぶ（葉部）

かぶ（葉部）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を9kg/10a（播種時土壌混和）し、20%水和剤の2,000倍希釈液を2回散布（150、150～200L/10a）し、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後3～14日において2.08, 2.82ppmであった。

⑩はくさい

はくさい（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を3 g/株（定植時植穴土壌混和）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（200L, 200～300L/10a）、計3回処理したところ、散布後3～21日の最大残留量は0.32, 0.43 ppmであった。

⑪キャベツ

キャベツ（葉球）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を3 g/株（定植時植穴土壌混和处理）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（200L/10a）、計3回処理したところ、散布後3～14日の最大残留量は0.82, 0.91 ppmであった。

キャベツ（葉球）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の50倍希釈液を1回灌注処理（500mL/箱）、1%粒剤を3 g/株（定植時植穴土壌混和处理）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（200L/10a）、計4回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後3～14日において0.18, 0.27 ppmであった。

⑫こまつな

こまつな（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を6kg/10a（定植時植溝土壌混和处理）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（150～200, 200L/10a）、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後14～15日において2.02, 0.40 ppmであった。

⑬みずな

みずな（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を6kg/10a（定植時植溝土壌混和）処理し、20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（200, 50～100L/10a）、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は散布後7～14日において0.53, 1.30ppmであった。

⑭ちんげんさい

ちんげんさい（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を6kg/10a（定植時植溝土壌混和）処理し、20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（150～300L, 200L/10a）、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は散布後3～14日において3.92, 2.02ppmであった。

⑮ブロッコリー

ブロッコリー（花蕾）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を2g/株（定植時植穴土壌混和处理）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（200L/10a）、計3回処理したところ、散布後3～21日の最大残留量は0.64, 0.14 ppmであった。

⑯しゅんぎく

しゅんぎく（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2,000倍希釈液を1回散布（100, 500mL/箱）し、20%水溶剤の50倍希釈液を1回灌注処理（500mL/箱）し、1%粒剤を20kg/10aで1回定植時植溝土壌混和处理し、20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（200L/10a）、計5回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は散布後1～14日において7.5, 12.7ppmであった。

⑰レタス

施設栽培のレタス（茎葉）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を2g/株（定植時植穴土壌混和处理）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（200, 300L/10a）、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験

を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後3～21日において1.00, 0.64 ppmであった。

施設栽培のレタス（茎葉）を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の50倍希釈液を1回灌注処理(500mL/箱)、1%粒剤を3g/株(定植時植穴土壌混和処理)、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布(200, 202L/10a)、計4回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後3～14日において1.67, 2.58 ppmであった。

#### ⑱食用ぎく

食用ぎく(花部)を用いた作物残留試験(1例)において、1%粒剤を2g/株(定植時植穴土壌混和)処理、及び20%水溶剤の3,000倍希釈液を2回散布(150L/10a)、計3回処理したところ、散布後7～21日の最大残留量は2.0ppmであった。

食用ぎく(花部)を用いた作物残留試験(1例)において、1%粒剤を2g/株(定植時植穴土壌混和)処理、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布(200L/10a)、計3回処理したところ、散布後7～21日の最大残留量は1.3ppmであった。

#### ⑲ねぎ

ねぎ(茎葉)を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を6kg/10a(定植時植溝土壌混和処理)、1%粒剤を6kg/10a(株元処理)処理し、さらに20%水溶剤の1,000倍希釈液を2回散布(200L/10a)し、計4回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後3～21日において0.70, 1.00 ppmであった。

ねぎ(茎葉)を用いた作物残留試験(1例)において、20%水溶剤の50倍希釈液を1回、灌注処理(500ml/トレイ)し、1%粒剤を9kg/10a(定植時植溝土壌混和)処理し、さらに20%水溶剤の100倍希釈液を生育期株元散布(100L/10a)、2,000倍希釈液を1回散布(200L/10a)、1,000倍希釈液を1回散布(100L/10a)し、計5回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後3～21日において1.03 ppmであった。

ねぎ(茎葉)を用いた作物残留試験(1例)において、20%水溶剤の50倍希釈液を1回、灌注処理(500ml/トレイ)し、1%粒剤を9kg/10a(定植時植溝土壌混和)処理し、20%水溶剤の100倍希釈液を生育期株元散布(100L/10a)し、さらに2,000倍希釈液を2回散布(120～150L/10a)し、計5回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後3～21日において1.82 ppmであった。

#### ⑳らっきょう

らっきょう(鱗茎)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の1,000倍希釈液を3回散布(200, 300L/10a)した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後1～14日において0.18, 0.26 ppmであった。

## ②1 にんじん

にんじん（根部）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を9kg/10a（播種時播溝土壌混和）処理し、20%水溶剤の1,000倍希釈液を2回散布（170L、541.7～597.2L/10a）、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後7～21日において0.13、0.34ppmであった。

## ②2 トマト

施設栽培のトマト（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を2g/株（定植時植穴土壌混和処理）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（200、300L/10a）、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後1～7日において0.14、0.35ppmであった。

施設栽培のトマト（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を40g/L（育苗培土混和）処理し、20%水溶剤の2,000倍希釈液を茎葉散布（1、0.2L/トレイ）し、さらに、50倍希釈液で灌注処理（500ml/箱）し、1%粒剤を2g/株（育苗期ポット株元散布処理1回、定植時植穴土壌混和処理1回）、20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（250L/10a）、計7回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後1～14日において0.20、0.34ppmであった。

施設栽培のミニトマト（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を40g/L（育苗培土混和）処理し、20%水溶剤の2,000倍希釈液を茎葉散布（1、0.2L/トレイ）し、さらに、50倍希釈液で灌注処理（500ml/箱）し、1%粒剤を2g/株（育苗期ポット株元散布処理1回、定植時植穴土壌混和処理1回）、20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（250L、200L/10a）、計7回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後1～28日において0.58、0.43ppmであった。

## ②3 ピーマン

施設栽培のピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を2g/株（定植時植穴土壌混和処理）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（200L/10a）、計3回処理したところ、散布後1～14日の最大残留量は0.43、1.18ppmであった。

施設栽培のピーマン（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を2g/株（定植時植穴土壌混和処理）、及び1%粒剤を2回株元処理（2g/株）、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後1～7日において0.10、0.07ppmであった。

## ②4 なす

施設栽培のなす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を2g/株（定植時植穴土壌混和处理）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（250L/10a）、計3回処理したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.26, 0.50 ppmであった。

施設栽培のなす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を2g/株（定植時植穴土壌混和处理）、1%粒剤を2g/株（株元処理）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（200, 157L/10a）、計4回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後1～7日において0.48, 0.46 ppmであった。

施設栽培のなす（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を2g/株（定植時植穴土壌混和处理）、1%粒剤2g/株を2回株元処理、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後1～14日において0.06, 0.08 ppmであった。

#### ㊸ししとう

施設栽培のししとう（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を2g/株（定植時植穴土壌混和处理）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（250, 150L/10a）、計3回処理したところ散布後1～7日の最大残留量は1.44, 1.50ppmであった。

施設栽培のししとう（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2,000倍希釈液を1回茎葉散布（500, 100mL/箱）し、20%水溶剤の50倍希釈液で1回灌注処理（500mL/箱）し、20%水溶剤の200倍希釈液で1回ポット灌注処理（20mL/株）し、1%粒剤を2g/株（定植時植穴土壌混和处理1回、株元散布処理1回）し、さらに20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（300, 90L又は120L/10a）、計7回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後3～14日において1.42, 1.60ppmであった。

#### ㊸とうがらし

施設栽培のとうがらし（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の2,000倍希釈液を1回茎葉散布（1000mL/箱, 200mL/3箱）し、20%水溶剤の50倍希釈液で1回灌注処理（500mL/箱）し、20%水溶剤の200倍希釈液で1回ポット灌注処理（20mL/株）し、1%粒剤を2g/株（定植時植穴土壌混和处理1回、株元散布処理1回）し、さらに20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（200L, 170L/10a）、計7回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後1～14日において1.8, 1.6ppmであった。

#### ㊸きゅうり

施設栽培のきゅうり（果実）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を

2 g/株（定植時植穴土壌混和処理）、及び 20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を 2 回散布(200L/10a)、計3回処理したところ、散布後 1～7 日の最大残留量は 0.43, 0.52 ppm であった。

施設栽培のきゅうり（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を 2 g/株（定植時植穴土壌混和処理）、1%粒剤を 2 g/株（株元処理）、及び 20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を 2 回散布（200, 250L/10a）、計 4 回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 1～7 日において 0.65, 0.38 ppm であった。

#### ㊸メロン

施設栽培のメロン（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を 2 g/株（定植時植穴土壌混和処理）したところ、散布後 80～99 日の最大残留量は <0.005, 0.030 ppm であった。

施設栽培のメロン（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を 2 g/株（定植時植穴土壌混和処理）、及び 20%水溶剤の 1,000 倍希釈液を 2 回散布(250 L/10a) し、計 3 回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 3～42 日において 0.47, 0.26 ppm であった。

#### ㊹すいか

施設栽培のすいか（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を 5 g/株（定植時植穴土壌混和処理）、1%粒剤を 2 g/株（株元処理）、及び 20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を 2 回散布（200, 250L/10a）、計 4 回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 7～28 日において 0.20, 0.13 ppm であった。

#### ㊺ほうれんそう

ほうれんそう（茎葉）を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を 9kg/10a（定植時植溝土壌混和）、20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を 2 回散布(150, 250L/10a)、計 3 回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 3～14 日において 9.33, 7.10ppm であった。

#### ㊻オクラ

オクラ（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を 9kg/10a（生育期株元処理）、20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を 2 回散布(180～250, 300L/10a)、計 3 回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 1～14 日において 0.46ppm, 0.56ppm であった。

#### ㊼さやえんどう

さやえんどう（さや）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の100倍希釈液で1回定植時灌注処理（30mL/株）し、1%粒剤を9kg/10aで1回定植時植溝土壌混和处理及び1回株元散布処理し、20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（300, 200L/10a）、計5回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後1～14日において2.49, 1.17ppmであった。

③③えだまめ

えだまめ（さや）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を6kg/10a（播種時播溝処理土壌混和）、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布（200, 220L/10a）、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後7～28日において0.53, 0.68ppmであった。

③④くわい

くわい（塊茎）を用いた作物残留試験（2例）において、1%粒剤を3回散布（3kg/10a）したところ、散布後60～90日の最大残留量は<0.02, 0.03ppmであった。

③⑤温州みかん（果肉）

施設栽培の温州みかん（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の1,000倍希釈液を計2回散布（400L/10a）したところ、散布後7～56日の最大残留量は0.46, 0.58ppmであった。

③⑥温州みかん（果皮）

施設栽培の温州みかん（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の1,000倍希釈液を計2回散布（400L/10a）したところ、散布後7～56日の最大残留量は1.95, 3.46ppmであった。

③⑦夏みかん（果肉）

夏みかん（果肉）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の1,000倍希釈液を計2回散布（500L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は0.012, 0.034ppmであった。

③⑧夏みかん（果皮）

夏みかん（果皮）を用いた作物残留試験（2例）において、20%水溶剤の1,000倍希釈液を計2回散布（500L/10a）したところ、散布後7～21日の最大残留量は1.34, 0.99ppmであった。

③⑨夏みかん（果実）



夏みかん（果実）を用いた作物残留試験（2 例）において、20%水溶剤の 1,000 倍希釈液を計 2 回散布（500 L/10a）した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は散布後 7～21 日の最大残留量は 0.49, 0.23 ppm であった。

⑩すだち（果実）

すだち（果実）を用いた作物残留試験（1 例）において、20%水溶剤の 1,000 倍希釈液を計 2 回散布（500 L/10a）したところ、散布後 7～21 日の最大残留量は 1.04 ppm であった。

⑪かぼす（果実）

すだち（果実）を用いた作物残留試験（1 例）において、20%水溶剤の 1,000 倍希釈液を計 2 回散布（500 L/10a）した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 7～21 日において 0.83 ppm であった。

⑫りんご

りんご（果実）を用いた作物残留試験（2 例）において、20%水溶剤の 1,000 倍希釈液を計 2 回散布（500, 600 L/10a）した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 7～21 日において 0.28, 0.19 ppm であった。

りんご（果実）を用いた作物残留試験（2 例）において、20%水溶剤の 500 倍希釈液を 1 回土壌表面散布（500L/10a）、2,000 倍希釈液を 3 回散布（600, 500L/10a）した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 1～21 日において 0.14, 0.10ppm であった。

⑬なし

なし（果実）を用いた作物残留試験（2 例）において、20%水溶剤の 1,000 倍希釈液を計 2 回散布（450, 500 L/10a）した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 7～28 日において 0.74, 0.45 ppm であった。

なし（果実）を用いた作物残留試験（2 例）において、20%水溶剤の 500 倍希釈液を 1 回土壌表面散布（500 L/10a）、及び 20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を 3 回（350L/10a）、計 4 回散布した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 1～28 日において 0.16, 0.42 ppm であった。

⑭もも（果肉）

もも（果肉）を用いた作物残留試験（2 例）において、20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を計 2 回散布（400, 450 L/10a）したところ、散布後 7～27 日の最大残留

量は 0.20, 0.48 ppm であった。

もも（果肉）を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の 500 倍希釈液を 1 回土壌表面散布 (400, 500 L/10a)、及び 20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を 3 回 (400, 500 L/10a)、計 4 回散布した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 1～28 日において 1.03, 0.54 ppm であった。

#### ④⑤もも(果皮)

もも（果皮）を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を計 2 回散布 (400, 450 L/10a) したところ、散布後 7～27 日の最大残留量は 1.24, 1.90 ppm であった。

もも（果皮）を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の 500 倍希釈液を 1 回土壌表面散布 (400, 500 L/10a)、及び 20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を 3 回 (400, 500 L/10a)、計 4 回散布した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 1～28 日において 5.28, 5.26 ppm であった。

#### ④⑥ネクタリン

ネクタリン（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を計 3 回散布 (270, 700 L/10a) したところ、散布後 1～7 日の最大残留量は 0.93, 0.86 ppm であった。

#### ④⑦すもも

すもも（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の 500 倍希釈液を 1 回土壌表面散布 (400, 500 L/10a)、及び 20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を 3 回 (400, 500 L/10a)、計 4 回散布した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 7～21 日において 0.18, 0.18ppm であった。

#### ④⑧うめ

うめ（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の 2,000 倍希釈液を計 2 回散布 (400 L/10a) したところ、散布後 7～21 日の最大残留量は 1.36, 1.94 ppm であった。

#### ④⑨おうとう（果実）

施設栽培のおうとう（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の 1,000 倍希釈液を計 2 回散布 (400, 500 L/10a) した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後 7～28 日において 2.76, 1.54 ppm であった。

おうとう（果実）を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の 500 倍

希釈液を1回土壌表面散布(500 L/10a)、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回(400, 500 L/10a)、計3回散布した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後1～28日において2.03, 5.05 ppmであった。

#### ⑩いちご(果実)

施設栽培のいちご(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を1g/株(定植時植穴土壌混和处理)したところ、散布後121～144日の最大残留量は0.61, 0.039 ppmであった。

施設栽培のいちご(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、1%粒剤を1g/株(定植時植穴土壌混和处理)、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を2回散布(200～201 L/10a)し、計3回処理した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後1～7日において1.58, 2.30 ppmであった。

#### ⑪ぶどう(果実)

ぶどう(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の1,000倍希釈液を計2回散布(400, 280～360 L/10a)したところ、散布後7～28日の最大残留量は3.36, 3.16 ppmであった。

#### ⑫かき(果実)

かき(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の1,000倍希釈液を計2回散布(300, 313 L/10a)した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後7～21日において0.50, 0.70 ppmであった。

かき(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の500倍希釈液を1回土壌表面散布(5 L/樹)、及び20%水溶剤の2,000倍希釈液を3回(300, 500 L/10a)、計4回散布した。この試験は適用範囲内で行われていないが、試験を行った範囲内での最も大きな残留量は、散布後1～21日において0.34, 0.55 ppmであった。

#### ⑬マンゴー

マンゴー(果実)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の2,000倍希釈液を計3回散布(200, 320L/10a)したところ、散布後1～7日の最大残留量は0.34, 0.32ppmであった。

#### ⑭茶(荒茶)

茶(荒茶)を用いた作物残留試験(2例)において、20%水溶剤の2,000倍希釈液を計2回散布(200 L/10a)したところ、散布後7～21日の最大残留量は9.10, 19.1 ppmであった。